

野田さんが庶民的で演説のテクニクがあるのはわかった。党内仲良くするために、小沢さんの取り巻きを重用したのもわかった。でも、「どじょう」とは、首相として具体的にどんな政治行動をとるのか？

党内融和とは結局、何のためなのか？ 輿石幹事長のような人事をしないと、被災地の人々や国民の生活にどんな悪影響が及ぶのか？ 小沢さんの党員資格停止解除の議論が高まると、どんな不都合が生じるのか？ 原発や復興より党内事情が優先なのはやはり変だ。新聞やテレビは、ものわかりがよすぎはしないか。

8月29日朝刊に渡辺記者は「国家観が語られなかった」と書いた。確かに身の上話や細かい話ばかりの代表選だった。しかし「国家観とはどういうことか」まで教えてほしい。「政治の劣化」と言われても、漠然とした不満とのギャップは埋まらない。

野田さんに語ってほしいかったのは「一人一人を大切に政治」のようなお題目ではなかったはずだ。今の日本が直面する課題の中で何を優先し、実現にどんな障害があると認識しており、その原因が何だと思いい、解決のためにどんな戦略を描いているか、具体的な分析が聞きたかったのだ。

原発についての考えがもつと知りたかった。放射能汚染の深刻さは、他の政策課題と比べてどのくらい優先順位か。判断の根拠となる情報は

## 「政治のコトバ」が不親切だ



奥村 信幸

十分か。情報公開を渋り、理解がたい言語を使ってきた電力業界や保安院などの構造をどうするのか。菅政権はどこが間違っていたのか、閣僚としてどう総括するのか。そう問い詰めることで国家観が浮き彫りにならないのか。

しかし、首相就任会見でも原発の再稼働や、安全性チェック体制の評価について真ッ先に質問したのは、外国とインターネットの記者だった。ついでに言えば、彼の声を聞ける貴重な機会に日程など他でも聞ける質問を平気でする記者は即刻退場してもらいたい。

東京新聞が「こちら特報部」(8月31日)で、「野田政権で『原子力ムラ』が巻き返してしまふ」と警告したのは評価したい。しかし就任会見で、原子力安全庁の設立を待たずに安全確認の手続きを検討するとした首相に対して、単に地元の原発を伝えるだけでなく、確認とは具体的に何なのかを問い詰めてほしかった。泊原発再開で不手際が次々に露見し、どの専門家を信頼していいのかかわからない中、安全性を暫定的に確認する「夢のような方法」があるのか、筆者の管見では思いつかない。

半日早い閣僚名簿や数票単位の票読みにどのくらいの価値があるのか。限られた取材リソースを振り替えて、近未来の課題を示す発想の転換がほしい。(立命館大学准教授) ※この批評は最終版を基にしています。

## 新聞を **読**んで